

名 称	千歳市子ども活動支援センター
所在地	〒066-0062 北海道千歳市千代田町5丁目7番1号
連絡先	TEL : 0123-24-0848 FAX : 0123-24-0900 URL : http://www.city.chitose.hokkaido.jp/

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 千歳市 92,464人（平成19年2月1日現在）

千歳市は、北海道の中西部・石狩平野の南端に位置し、国立公園支笏湖や清流千歳川をはじめとする豊かな自然環境に恵まれ、空港と鉄道、高速自動車道が密接に結びつく北海道の一大交通拠点という特性を生かしながら、道央圏の中核都市として着実に発展している。

平成13年度には「千歳市第3期社会教育長期計画」を策定し、従来の発想や枠組みを超え、新しい時代に即応した、共に生きる地域社会の実現と生涯学習社会の創出を支援する社会教育を推進している。

コーディネートした事例の名称、概要、特色

名称 「子ども活動支援センター春休み開放事業『アイヌ文化にふれてみよう』」

夏休み・冬休みとは異なり、期間が短く研究課題が出されることが少ない春休み期間に、子どもたちに体験学習の場を提供し、また参加費無料の事業であるため遊び感覚で参加でき、今後も気軽に子ども活動支援センターを利用していただくためのPRも兼ねた事業となっている。

事業内容は、身近にありながら実際の体験を通して学習する機会が少なかったアイヌ民族の伝統的な文化に対し、あらゆる面から理解を深めさせるために、様々な手段を用いた体験学習の場を提供する事業を行った。

まず初めにアイヌ民族の生活面における文化を体験するための手段として「触れること」にポイントを置き民族衣装の着衣体験や、まな板や食器などの手作りの木製食器に触れて、その使い方について学習した。次に芸術面における文化を体験するための手段として「演奏すること」「作ること」にポイントを置き、ムックリやトンコリ等の民族楽器のルーツや演奏方法を学び、実際に演奏体験を行った。また民族衣装などに使用されるアイヌ模様について学習した後、自分たちのオリジナルアイヌ模様を切り絵で作成した。最後に語学面における文化を体験するための手段として「聞くこと」にポイントを置き、主なアイヌ語の単語学

習と、講師が自費出版した昔話「ウラウシナイの男の子」「イオンノッカ」の内容説明とその本の読み聞かせを行った。

このように様々な手段を工夫して用いることによって、短時間の中で民族文化の歴史や特徴を学び、理解を深める場を提供する事業となっている。

コーディネートの実際

子ども活動支援センターのコーディネーターが日頃の市民活動を通じて1人の人物と知り合うこととなった。その人物は自分のルーツがアイヌ民族であることに誇りを持っており、自分が所有している祖先から代々伝わってきたアイヌ民族の生活道具などを学習材料として、地域子どもたちに身近にあるようで触れることの少ないアイヌ民族の生活文化についての学習の場を提供したいという考えがあることを知った。

しかし、これまで学習提供の場がなかなか見つからずにいるという実情を聞き、本人に子ども活動支援センターの活動内容を説明したところ、その趣旨に理解を示していただいた。そこで春休みの期間に行われる子ども活動支援センターの事業に、本人が常日頃行いたいと思っていたアイヌ民族の文化に関する学習事業を組み込んでみてはどうかと持ちかけたところ、非常に快く当事業の実施について承諾していただいた。

事業内容は本人が講師となり、アイヌ民族の衣装をはじめとした生活道具等を紹介し、参加者が主に三つの体験を通じて民族文化に対する理解を深めさせることをねらいとすることにした。

- ① 「触れること」で自分たちの日常生活との共通点及び接点を見出し異文化を身近なものとしてとらえる。（民族衣装の着衣体験、生活道具の使い方学習）
- ② 「作ること」で創造性を養い、民族芸術の理解と歴史的探究心などの学習意欲の向上につなげる。（民族楽器の演奏体験、オリジナルアイヌ模様の切り絵作成）
- ③ 「聞くこと」で言葉の違いなどを認識し異文化に対する理解を深める。（アイヌ語の単語学習、昔話の読み聞かせ）

事業の周知に関して、苦慮した点が2点あった。一つ目は気軽に参加してもらえるよう宣伝文句やポスター・リーフレットの表現を柔らかく親しみのあるものにしようと心がけたが、民族文化を軽視した表現にならないよう細心の注意を払い、白老町等のアイヌ民族文化に関する事業が盛んであると思われる近隣市町村にアドバイスを受けながら実施した。

また前日までに参加希望者が少なかったこともあり、市内の図書館でコーディネーターが子どもや保護者たちへリーフレット配りを行い積極的にアピールを行った。

しかし当日の参加者は児童が3人とごく少人数であり、また母親に進められて参加した児童が多かったが、参加したことによって異文化への親しみが持てたという感想が得られ、同伴した保護者からも好評を得ることができた。

また事業実施の翌月、市内の小学校から子ども活動支援センターに連絡があり、総合学習の時間にアイヌ民族文化についての体験学習を取り入れているが、当該事業について新聞記事を見て非常に感銘を受けたため講師を紹介していただきたいとの依頼があった。このよう

に当日の参加者は少なかったが、事業を行うことによって影響を受けた別団体が事業を展開していく波及効果が現れるという成果があった。今後も参加者数にとらわれずに、事業の有効性をコーディネーターが検証し、実施していく必要がある。

今後の課題と改善点として、参加者数が3人と少人数であり、参加動機も母親に勧められて来たケースが多かったので、子どもたちが自主的に参加する意欲が沸くような魅力的な事業であることをPRする必要がある。またより多くの参加者が集まるよう、積極的にPTAや町内会等に呼びかけ、事業の宣伝広告を工夫して取り組んでいく必要がある。

今回の事業では問題にはならなかったが、民族文化等デリケートな要素を含む事業を行う際は、他の関連団体と密接に調整を図り、相互の理解を得た状態で行うことに留意することが必要であり、今後の改善点であると認識した。



民族楽器



読み聞かせ



切り絵



民族衣装

執筆者職・氏名：千歳市教育委員会 生涯学習課社会教育係 主事 井鳥 秀司